原隆一著『イランの水と社会』

古今書院, 1997, xiii+206pp.

小 牧 昌 平^{*}
KOMAKI Shohei

本書は、イラン東部ホラサン州⁽¹⁾のビルジャンド地区における、人々の自然への適合の営みをまとめたものである。本書のようなイランの農村を扱った実地調査に基づく研究書には、我が国においても、すでに大野盛雄氏や岡崎正孝氏⁽²⁾のものがある⁽³⁾。著者の原氏の調査・分析の方法は、現地調査と歴史研究の調和を求めた岡崎氏の手法よりも、長年にわたる現地調査を踏まえ、各地の農村を比較検討しながら、イランにおける農村の成り立ちや構造を解明してきた大野氏により近いものがあるといえよう。

著者の専門とされる社会学や農村の実際などについては、評者はほとんど語る言葉を持たない。しかし、たまたま、異なる分野からではあるが、著者と同じ地域に関心を持っていることから、その研究の一端を拝聴する機会が何度かあり、多くのことを教えられてきた。それで、氏の研究成果が集大成されることを期待していた。つまり、評者にとっては、本書は不得手な分野からの待望の書ということになる。

それゆえ、評者には、本来、本書を評する資格などあろうはずがない。しかし、それにもかかわらず、あえてここに一文を草するのは、同じ地域に関心を持つ他分野の者からの見方を提示することによって、今後の共同研究の可能性も含めた、この地域の研究・分析の深化を図りたいからである。そのため、見当違いの発言もあろうかと思うが、あらかじめ、原氏のご寛恕をお願いする次第である。

I.

本書は、序に続き、以下の6章から成っている。I章 自然環境と歴史、II章 灌漑、III章 経済構造、IV章 社会構造、V章 社会変動、結章。まずここでは、順を追って本書の内容を紹介していくことにする。

I章においては、まず、イランの自然環境について、降水量を基礎にした地域単位の分類が行われているが、それによれば、本書の舞台のビルジャンドは、イスファハンやケルマンなど、イラン高原の主要都市同様、年間降水量100~200ミリ、高度1000~2000メートルの「沙漠周縁地域」に含まれる。さらにこの地域は、沙漠と山岳地帯に挟まれ

* 上智大学外国語学部助教授

Associate Professor, Faculty of Foreign Studies, Sophia University

た地域の広い「北東型」と、狭い「西南型」に分けられ、前者に属するビルジャンドでは、農業が主で、牧畜が従という生産形態を採る。とはいえ、降水量が少なく、乾燥が激しいために、カナート（地下水路）などの人工灌漑が不可欠である。

ビルジャンドはホラサン州の州都マシュハドの南500キロに位置し、アフガニスタンとの国境にも近く、今日では「辺境」ともいえる地区である。しかし、歴史的には、特に18世紀後半以降、アラム家という豪族が台頭し、中央政権からも一目置かれる存在に成長した。この一族は、1960年代には首相まで輩出した。1963年、ホメイニ師を国外追放したアサドッラー・アラムである。

一方、本書の舞台であるフルクむらは、ビルジャンドからさらに80キロ東に位置する。渓谷に挟まれた緩やかな傾斜面に位置しているが、この地形がこのむらの経済・社会生活を考える上できわめて重要である。現在、ここは人口1000人あまりのスニー一派のむらであるが、伝承では1000年以上の歴史を持ち、19世紀末からは、英露の角逐、いわゆるグレート・ゲームに巻き込まれ、一時注目されたこともあったという。

II章では、この地域における灌漑の重要性と、その実態について詳述される。乾燥地域においては、水獲得の多寡とその安定度に応じて、遊牧、乾地農業、灌漑農業に分類できる。フルクむらでは2本のカナートが水源になっており、農耕だけでなく、生活全般に利用されている。

III章では、フルクむらの経済活動の分析が行われる。ただし、ここでは主にイラン・イスラム革命前の状況が中心であり、V章で革命後との比較が行われる。

フルクむらは先に挙げた立地条件から、狭い土地と不安定な水供給しか望めず、大土地所有には向いていない。専業農家はごくわずかで、多くは零細農家である。主要な作物は、小麦のほかに、商品作物としての砂糖大根、ケシ（イラン・イスラム革命後、栽培禁止）であるが、最近はや収益性の高いゼレシキ（バーベリー、赤い小さな実を乾燥させてピラフに混ぜる）栽培が拡大している。

農業と並んで、牧畜もフルクむらでは重要である。牛なども飼われているが、最も重要なのは羊と山羊である。絨毯織りも行われている。むらの絨毯業の特徴としては、市場向けの商品としての生産（輸出を含む）であることと、男性の専業労働力に依存していることである。

IV章では、まず、イランの農村社会に存在するホシュネシオンといわれる、土地も水利権も持たない階層を取り上げる。従来、ホシュネシオンといえば、最下層の者たちを想起しがちだが、実際には、職人や聖職者などの「伝統的村抱えホシュネシオン」がその原型で、伝統的に農村社会を支えてきたという。

次に、平地の大土地所有の農村と山地の小土地所有の農村との間の、社会構造の比較

が行われる。アラム家など不在地主が所有する平地の村では、地主の任命した差配や監視人などがむらを統制し、垂直的な支配と従属の関係にあった。これに比べれば、山地農村における在村小地主と分益農との関係ははるかに緩やかなものであった。

V章では、農地改革とイラン・イスラム革命が農村社会に与えた影響について論じられる。1962年に始まった農地改革で、耕作権農民の9割近くが農地再分配の恩恵を受けたが、その圧倒的多数は農業収入だけでは生計の維持が困難な小農であった。旧い体制が維持されたこともあり、農業部門の成長率は予想ほどには伸びなかった。このため、特に1970年代の石油収入に支えられた高度成長期には、都市部との格差は拡大し、農村人口の都市への流入が加速度的に増大した。

1979年にイラン・イスラム革命が達成されると、新しいイスラム政権は、農業重視と小農民育成を基本政策とし、政策遂行のために農村復興聖戦隊などの革命機関を次々と設立した。聖戦隊は農村にイスラム農村評議会を設立して、イスラム的理念に基づく村落政治を指導しようとしたが、その過程で、聖戦隊がいろいろな形で評議会に干渉したり、中央政府内での争いのために混乱が生じたりした。

その一方で、革命直後の混乱の中、ホシュネシオンや零細農などによる農地奪取や、革命機関が不在地主の土地を接収する動きが各地で見られた。これに対し、農村での秩序回復を求める声が高まり、1980年には、イスラム農地改革法案が提出された。これをめぐっては、大論争となったが、結局、1986年に3年間の期限付き緊急措置令としてようやく成立した。この法令によって大土地所有者の水所有を基盤とする経済・政治的支配は終結したと著者は結論づけている。

革命後のフルクむらでのもっとも大きな変化は、アフガン難民の出現である。200万人ともいわれる多くの難民が内戦を逃れて国境を越えてイランに流入してきた。当時はイラン・イラク戦争の真っ最中で、政府にとって難民受け入れは相当の負担になった。また、経済状況が悪く、失業の危機にさらされていた一般のイラン人にとって、安価な労働力としての難民の存在は脅威であった。こうしたことや文化的優越感などもあって、一般にイラン人の難民を見る目は冷たかった。しかし、フルク村などの東部では状況は異なり、住民との関係は比較的良好であったのである。その理由としては、同じスンニー派という宗派の共通性と、歴史的・伝統的なつながりの強さによるものと思われる。

最後に、結章において、本書のまとめとして近年の沙漠周縁地域の置かれている状況が要約される。そこでは、洪水被害の多発化、土壌の塩類化、沙漠化といった環境問題、人間の流動性を生み出す内的・外的要因、ビルジャンド地方の重層的文化的構造について、言及されている。

II.

本書はビルジャンド地方における著者の長年にわたるフィールドワークの成果である。この地方は、首都のテヘランやホラサン州の州都マシュハドからも遠く離れた「僻地」で、便も決してよくなく、自然環境も厳しいため、外国人研究者であってもなかなか調査対象にしにくい場所である。そのようなところで、1970年代後半から、革命や戦争などの変動を経ながら、長期にわたって定点観測を続けてこられた著者のご苦労にまず敬意を表したい。その結果として、湿潤なカスピ海南岸地方はもちろんのこと、イラン高原中央部（著者の言う「西南型沙漠周縁地域」）など比較的紹介されている地方ともやや様相の異なったこの地方の状況が、本書中で明らかにされているのである。

この地域は、水の供給も不足しがちで不安定な上に、土地も狭いという条件が重なっているため、大土地所有に向かず、零細農家が多い。水の獲得には苦勞しており、春先に集中する降雨が洪水化するのをうまく利用するバンド（堰堤）農業が行われている。その具体的な方法については、本書を参照してもらいたい（pp. 44-49）が、評者のような門外漢はその思いもよらない意外な方法と工夫に驚かされ、心動かされる。同じく、水の分配は農民たちにとっては死活問題であり、そのために、非常に複雑で、それでいてよく考えられた合理的な水利慣行が行われている。こうした点を見ていくと、農民たちの水への執着が直接にひしひしと伝わってくる。一般に、イランの大都市に居住する知識人たちなどは、農民に対して根拠のない偏見を持つ場合が少なくないが、このような水獲得の知恵と工夫を知れば、そのような農民観が必ずしも当たっていないことを思い知らされる。

また、イランの中でも辺鄙な地域とはいえ、ゼレシキなどの商品作物や絨毯生産などを通して、国内外と経済的につながっている。このように、一見隔離されているように見えるところでも、様々な形で外部の世界とつながっていることは広く見られることである。そうしたことを示唆する外部とのネットワークについては本書の中でも若干言及されているが、たとえば大都市に居住する出身者とのつながりなど、もっと包括的に触れてあってもよかったのではないかと思う。

また、特に絨毯生産については、一般には農村の女性たちの副業と考えられがちであるが、フルクむらでは男性専業者たちが徒弟制度の下で行っているとの指摘は興味深い。この徒弟制度については、たとえばギルドのようなものがあるのか、渡り職人的な者が存在するのかなど、興味は尽きない。そして、このような生産形態がどの程度の範囲でこの地域に普及しているのか、もっと詳しく知りたいところである。なお、絨毯生産がいかに労のみ多くて収益の少ないものか、具体的に数字を挙げて明らかにされ、国際的な競争と人手不足の中で、この業界も転機にあることが示されている点はきわめて説得

的である。

さらに、この地域の人々が国境を越えてアフガニスタンのヘラートなどとの結びつきをさまざまな形で保持していることが、本書では随所で指摘されている。アフガン難民の受け入れ方がほかの地域とは異なって好意的だったことなどは、その一つの現れであろう。また、人の流れだけでなく、著者が注目している「技術」についても、たとえば前述のバンド農法の技法などはインダス川西岸、バルチェスタンなどとも共通するといふ。

こうしたことの理由の一つとしては、スンニー派という宗派的共通性が挙げられる。シーア派が圧倒的多数を占めるイランにあって、この地域やその南のバルチェスタン州ではスンニー派が有力である。こうした宗派上の問題では、国境を越えたアフガニスタンやパキスタンなどと同じである。だからこそ、フルクむらのアーホンド（説教僧）はヘラートやカラチ、バルチェスタンの州都ザヘダンで教育を受けているのである（p.118）。

スンニー派が多いというこの地域の特徴は、ビルジャンドやフルクむらにおけるイラン・イスラム革命やイラン・イラク戦争当時の対応と合わせて考えると、大変興味深い（p.152）。革命当時には、ビルジャンドでは国王支持のデモが行われたり、革命後、ホメイニ師批判を行って逮捕・投獄された神学生が出たという。また、むら人は、イスラム教徒同士の戦いで殉教はありえないとして、むらから志願兵や殉教者が1人も出なかったことを誇りにしているという。

ただ、著者も指摘するとおり（p.163）、宗派の共通性や相違をあまりに強調することは、一方では単純な「レッテル貼り」に陥る危険もあり、注意が必要である。むしろ、宗派の共通性なども包含した歴史的・伝統的なつながりが、今日に至るまで、人為的な国境を越えて保持されていると考えるべきであろう。

著者はそのようなつながりを持った世界を「ヘラート文化圏」（p.164）と表現している。この用語自体についての議論はとりあえず置くとしても、前近代以来のそうしたつながりが今日まで保持されているということは、この地域についての我々の認識にある種の変更が必要になるということでもある。つまり、この地域は、イラン・イスラム共和国の東端であるとともに、そうした国境の枠を越えた一つの「文化圏」の一部でもあるのである。そこでは、スンニー派ハナフィー系の人々が多数を占め、民族的にも、イラン系、アラブ系、トルコ系が混住している（pp.134-135）。また、自然環境や風土の類似性から、生活習慣や様々な技法などにも共通性が見られるであろう。著者の言う、この地域での「基層文化」（pp.183-184）である。

そのような世界では、ビルジャンドはもはや「辺境」や「僻地」ではないのである。

このような伝統的な世界は前近代的なものとされ、国民国家の形成で消滅したかのよう
に考えられがちであったが、実はしっかり今日まで維持されていたことが本書からも明
らかにされたのである。

ここで著者が言う「ヘラート文化圏」に相当する世界と、現在のイラン領ホラサン州
の範囲を超えてヘラートなどをも含む「歴史的ホラサン」あるいは「大ホラサン」との
関連性については、慎重に検討されるべきである。本書で取り上げられた人の流れなど
のほかに、人々の意識や文化的側面なども考慮に入れなければならないだろう。評者は、
微力ながら、歴史史料の中から政治史的問題を取り上げつつ、この点について考察し
ようとしているところであり、著者とは全く違う手法を用いながら、同じ問題を追求す
る可能性を考えている。

III.

最後になったが、本書を読んでいくうちに気づいた細かな点をいくつか指摘したい。

評者のように、実際の農村での体験に乏しいものにとっては、農村社会や農民につい
ての本書のような現地調査に基づく文献は、様々な点で多くのことを教えてくれる。こ
の点は、かつての大野氏や岡崎氏の研究でも、山田稔氏によるアーレ・アフマドの小説
(6)の翻訳でも同じであった。今回も、そのような前例と全く同じ経験をした。たとえば、
フルクむらでは、「休閑」を *nākār* (無耕作)、「地力」を *zūr* (力) と表現する (p.106) と
いったことは、直接本論の流れの中ではたいして重要でないのだろうが、評者のような
者には、読んでいて何となくためになったような、得がたい知識を得た気分にしてくれ
る。こうしたことは文献などからはなかなか得られないものであり、現地で場数を踏ん
でいる研究者の強みである。

その一方で、歴史学に関わる立場の者として、見逃せない点についても述べておきた
い。まず、p.16 掲載のアラム家の家系図である。これは大変興味深いものであり、近現
代の名家研究の際にも貴重な史料として活用しうるものであると考えられる。著者がこ
の家系図を信頼の置けるところから入手したということを、評者は個人的に伺ったこと
がある。ところが、本書では、その入手先というか、出典が明示されていないため、こ
のままでは歴史研究の場では利用できない状況にあり、まことに残念である。

同じことは、p.29 のラフィーイ家の家系図についても当てはまる。こちらの方は、
おそらく、フルクむらの歴史叙述に著者が利用している『ラーメ詩集』に依拠している
ものと思われるが、出典はやはり明らかにされるべきである。その上で、この興味ある
史料についてもぜひ広く紹介していただきたい。同書は、この地方に関する、これまで
ほとんど利用・紹介されていない貴重な史料であると推測されるからである。

また、歴史畑の人間はすぐに瑣末なことで揚げ足を取りたがると著者から叱られそうだが、以下の点に気づいたので、敢えて指摘させていただきたい。

残念ながら、本書には誤植が数カ所あるようである。たとえば、マシュハドの「第7代（実は8代）イマーム・レザーの聖廟」（p.12）といった類である。それ以外に、実際とずれているのではないかと思われる年代もいくつかある。そうした次元の問題でもっとも気になったのが、「1739年、ナーデル・シャーはインドのデリー城を占領してムガル王朝を滅ぼした。」（p.29）という箇所である。ナーデル・シャーの遠征後も同王朝は存続しており、1858年滅亡とするのが、やはり一般的であろう。このような細かいことをあげつらうかのように指摘するのは、もちろん悪意に基づくものではなく、こうした瑣事で本書の価値がわずかでも低く見られることを恐れるからである。

敢えて、失礼を顧みず、批判めいたことも若干述べさせていただいたが、もちろんそのようなことは本書には何の瑕疵にもならないだろう。評者などにはとうてい模倣もできない、長年にわたる現地調査の上に立った本書は、多方面の研究者にいろいろな形で刺激を与え、貢献するものと確信する。また、イラン東部のこの地域に関しても、著者が現地で集められた多くの貴重な情報と文献などから得られるものを総合すれば、著者の言う「ヘラート文化圏」の問題などについても、より議論を深化できることは間違いないだろう。本書を新たなより重層的な研究活動の出発点として評価し、期待するものである。

注

- (1) 本稿におけるペルシャ語表記や用語・訳語については、原則としてすべて本書に準ずる。
- (2) 大野盛雄『ペルシャの農村——村の実態調査』（東京大学出版会、1971）を初めとする、氏の一連の著作。
- (3) 岡崎正孝『カナート・イランの地下水路』（論創社、1988）
- (4) p. ii で著者も指摘しているとおり、一般に、イラン人研究者は「現場ざらい」で、外国人以上に、こうしたところに入るのは敬遠する傾向にある。
- (5) 拙稿「19世紀初期のホラーサーン——初期のカージャール朝についての一試論」（『上智アジア学』、10、1992、pp.17-42）、同「18世紀中期のホラーサーン——ドゥラーニー朝とナーデル・シャー没後のアフシャール朝」（『東洋史研究』、56-2、1997、pp.176-200）などを参照いただければ幸いである。
- (6) アーレ・アフマド（山田稔訳）『地の呪い』（アジア経済研究所、1981）
- (7) なお、「休閑」の意で「寝ている」の意味の *khāvideh* も用いられるとあるが、*khābideh* の誤植であろう。